

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 5 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370116

研究課題名(和文)近代日本の美学芸術理論の総合研究 間文化性の視点から

研究課題名(英文) Integrated study on aesthetics and art theory in modern Japan from an intercultural perspective

研究代表者

小林 信之 (Kobayashi, Nobuyuki)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：30225528

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代日本の思想および芸術活動において蓄積された文化哲学的・美学的理論を再検討すると同時に、比較思想および間文化性の観点から、それを他の諸文化圏の美学のなかに位置づけようという試みであった。いいかえるとそれは、アジアの近代化・西欧化という歴史的な脈において日本近代の思想形成を相対化し、同時にその埋もれた可能性に光を当てることでもあった。今回の研究は、西田幾多郎の芸術論など、忘れ去られつつある業績を含め、それらを再評価することで、従来にない切口を探ろうと努めた。主要な個別的研究テーマとして集中的にとりくんだのは、創造作用としてのポイエシス、詩作と歴史、美的なもの時間性等の主題である。

研究成果の概要(英文)：This study was an attempt to re-examine theories of cultural philosophy and aesthetics to date originating from artistic movements and schools of thought of contemporary Japan, while trying to determine how these theories fit in with concepts of 'aesthetics' in various other cultural spheres. In other words, this study examines the formation of modern Japanese ideologies in counterpoint to the historical context of modernization/Westernization in Asia, while shining a light on the possibilities buried in that line of inquiry. This study endeavors to explore a non-conventional approach, re-evaluating the artistic theories of Kitaro Nishida and others, including achievements that are at risk of being completely forgotten. Major individual research topics engaged with intensively by this paper include the subjects of poesis as a creative act, poetry composition and history, and the temporal nature of beautiful things.

研究分野：美学・文化哲学

キーワード：美学 間文化性 西田哲学 ポイエシス

1. 研究開始当初の背景

これまで本研究者は、とくにヨーロッパの哲学者、日本文化研究者を中心に学术交流をおこないつつ、比較思想の視点から、近代日本において形成された美意識や感性、芸術理論の研究をおこなってきた。日本語の特殊性ゆえに、哲学思想など、人文系の学問的蓄積はこれまでその大部分が日本国内に限定されざるをえなかったといえようが、しかし今日世界がグローバル化の波に覆われているなかで、単なる日本文化紹介にとどまらない、広い視野に基づく研究がなにより求められている。本研究者は、こうした基本認識のもとに、美学・芸術理論を中心にすでに幾篇かの論文を海外で刊行してきたが、その延長上にさらなる研究の展開を計画するにいたった。

具体的には、明治期以降の美学・芸術理論の生成と発展過程を、とりわけ西欧との比較思想ないしインターカルチャー（間文化性）の視点から究明することがめざされた。いいかえるとそれは、アジアの近代化・西欧化という歴史的な文脈において日本近代の思想形成を「相対化」し、同時に埋もれた可能性に光を当てることでもあった。今回の研究は、近代日本の文化形成においてこれまであまり注目されてこなかった業績をふくめ、それらを「再評価」することによって、従来にない切り口を探ろうと考えるものであり、そうしたことの自覚が本研究の背景をなしている。

2. 研究の目的

本研究は、近代日本の思想および芸術活動において蓄積された美学理論（美意識論・美術理論・感性文化論等）を再検討すると同時に、比較思想および間文化性の観点から、他の諸文化圏の美学のなかでそれを相対化しつつ、その固有性を際立たせることを目的としている。具体的にめざされた項目としては、おおよそ以下の項目にまとめることができる。

(1) アイステーシスの概念をより原理的に検証する哲学的議論のもとづき、広範な文化論的・美学的視野から、感性的なもの・美的なものを問うこと。その際、とりわけ哲学的な議論としては、言葉の分析と解釈の作業が欠かすことのできない課題として浮かびあがってくる。こうした前提のうえで、坂部恵の『ふれることの哲学』といった著作の解釈が企てられ、日本語の「ふれる」という言葉と触覚経験の連関、さらにはそこから展開可能な作品解釈（現代日本文学の作品の解釈）がめざされることになった。こうした作業をつうじて、美学という学問領域の深化と拡張をはかることが企図されたのである。

(2) 哲学および美学の領域における間文化的比較研究の議論を、近代日本思想と西欧哲学とのあいだで検証すること。具体的には、西田幾多郎の芸術論（とりわけ「歴史的形

作用としての芸術的創作」に結実した考察）を軸に解釈をおこない、それをハイデガーをはじめとする現象学的思考における芸術解釈と比較しつつ、両者の固有性を際立たせることがめざされた。こうした作業の目的は、単に美学・芸術学上の主題領域に限定するのではなく、より広く、哲学的時間論や、詩をめぐる諸問題へも波及していく可能性を秘めたものであった。

3. 研究の方法

研究目的を実現するにあたって採用された方法と研究の道筋はおおよそ以下のようにまとめることができる。

(1) まず本研究の遂行に必要な基礎資料を収集し、整理すること、さらにそれらを厳密に分析し理解することが、なにより重要であった。そのために早稲田大学以外に散在する研究資料の閲覧と読解、日本思想史・美学・美術史関係資料の図書を本研究機関（早稲田大学文学学術院）に収集し、保管することがなされた。このように研究の方法論としては、過去の研究資料の実態調査をふまえつつ、さらなる原典資料の発掘と解釈等、地道な基盤研究を第一におこなっていくオーソドックスな人文科学的研究方法である。

研究テーマの中心としては、とくに西田哲学における芸術論に注目し、それとの比較において、現代西欧における芸術概念の変容という問題をつきつめていくことがあげられるが、そうした手順にそって、基礎的文献資料が集められることになった。それゆえ、ここであつかわれる文献・資料は、西欧哲学や美学芸術理論のみにとどまらず、きわめて広範な（いわば学際的な）領域におよぶものとなった。

(2) さまざまな機会に開催された学会や研究会議、セミナーやシンポジウムに参加し、多様な研究者との議論をつうじて知見を広めること。また、そうした場において積極的に研究成果を公表し、ひろく批判的検証の機会を得ること。研究の方法論として、このような研究者共同体内部での議論の場を身をおくことが何より必要であった。

(3) 以上を踏まえつつ、積極的に研究成果を発表し、そのことをつうじて、研究者相互による成果の検証と、さらなる展望の獲得が企てられることになった。なお、本研究の遂行と公表全般にわたって、文献資料の整理や、コンピュータへの入力、また各種の連絡調整業務など、多様な作業が必要であり、研究助手的な立場の協力者もふくめ、共同作業としての側面ももつものとなった。

4. 研究成果

(1) まず「ふれること」に関する現象学的研究と現代日本文学の感性の考察等の研究

成果をあげることができる。坂部恵の『ふれることの哲学』における日本語の分析（ふれるということばの意味論的広がり）を起点として、触覚現象そのものの哲学的分析をおこなった。

第一に主題化されたのは、そもそも「ふれる」とはどのような経験なのかという問いである。皮膚によって何かにふれることでわたしたちは、そのものの感触、肌理、質感、ぬくもり等々を感じとり、そのようにしてそのものを「知覚」しているとさしあたり考えられる。ところで、見たり聴いたりすることと同様、そのように皮膚や手によって触知する知覚経験（狭義の触覚）も、現象学的には、主観による対象構成の働きにほかならないといえようが、しかしそうした知覚経験に先立って、わたしたちはすでに、身体感覚の次元で物にふれているのではなからうか。ふれることによって、対象化以前の主客未分の領域が開かれるといてもいいかもしれない。あるいは見たり聴いたりする場合でさえも、わたしたちは、視覚的・聴覚的に対象把握する以前に、眼によって、また聴くことにおいて、この世界の現実に「ふれている」のだともいえよう。この意味でふれることは、手の感覚、皮膚感覚といった触覚のみに限定されるわけではない。また、ミンコフスキーの言葉を借りれば、生命にとって感覚は、単に知覚し、指示するためだけにあるのではなく、「さらにその展開としてより深くへ侵入し、かくしてわれわれの存在のもっとも深い層に触れるためにある」ともいえよう（E・ミンコフスキー『精神分裂病』）。いいかえれば、この世界の現実に距離をおいて対象化するのに先立って、わたしたちが、存在する物や他者とかかわりつつ、世界の立ち現れの場において生きること、そのこと自体が「ふれること」であるともいえよう。それは、「諸々の存在と諸々の事物とがそこにおいて浸され会合する万物照応の深さの世界、深さの宇宙にふれることにほかならない」。

本研究は、このような「ふれること」をめぐって繰り広げられたものであり、それは以下の段階を追って展開された。

一、まず日本語の「ふれる」という言葉自体についての考察がなされた。その際、先に挙げた坂部恵の『「ふれる」ことの哲学』における議論が出発点としてとりあげられた。

二、フッサールやメルロ＝ポンティの現象学における「ふれること」の分析がとりあげられた。そこでは、ふれることは、前述定的次元において生起し、知覚の働きの基底において、それを可能にするような働きであるとされている。

三、だが、そのように一般的な意味で考えられた世界の現実との接触は、じつは他者関係によって初めて可能になる。ここにおいて、他者にふれるという経験、つまり身体を媒質とする間主観的交流の次元を考察する必要が生じた。

四、しかし他者の他者性は、そうした日常性の次元での「ふれあい」、コミュニケーションで汲みつくされるわけではない。むしろ他者の他者性の中核は、けっしてふれることができないという絶対性にあるのではないか。このことがレヴィナスの思想をつうじて検討された。

五、日常的な接触の断絶を意味する、このような絶対的他者性という点に関して、ここでも日本語の「ふれる」という言葉は示唆的である。つまり日本語では、「境界や法にふれる」といった言いまわしがあり、さらには「気がふれる」という表現もある。ここには、けっしてふれえないものへの接近、接触、侵犯といった事態が暗示されている。坂部恵の言葉を借りれば、「ふれることは、したがってふれるものとふれられるものの、前もっての一方的分離を前提とするものではなく、何らかの程度において自他の区別、内外、能動受動の区別を含めて、これまでの差異化弁別の体系の構造安定的な布置をあらためて無に帰し、根底から揺り動かす相互嵌入の契機を本質的に伴っている」。それはいいかえれば何らかの程度においてカタストロフィックな経験であり、そのような垂直の次元とのカタストロフィックなふれ合いの経験を、日本語は伝統的に「気がふれる」という表現であらわしてきたのではないか、ということである。このような絶対性を他者関係の基底に据え、それを倫理のよりどころとして強調すること（レヴィナス）も可能であろうが、現象としてこの意味での他者は、あくまで非情で不気味なものとしてのみ「顔」をのぞかせるとみなさねばならない。そうした禍々しさをはらんだ「ふれることの物語」として桜庭一樹の小説『私の男』をとりあげて解釈を試みた。

（2）西田幾多郎の「創造性」に関する思想、とくに彼の時間論と詩論を2015～2016年に集中的に研究した。すなわち「瞬間とポイエシス」をテーマとする研究である。この世界に生起する出来事にはつねに「変化」が前提されるとすれば、プラトンが『パルメニデス』で語ったように、ある状態から別の状態への移行行きにおいて、切断の瞬間（「突如」と訳される *exaiphnes*）を想定せねばならない。この瞬間は、動と静のあいだに座を占め、それ自身時間に属していないために、わたしたちの理解可能性の地平において、事後的な痕跡として、あるいはたえず失われゆく仮象として、思惟されるほかない。ところでこのように切断であり非連続である瞬間のうちに、仮象の否定性をみるのではなく、むしろそれを転倒させ、そこに「永遠のアトム」（キルケゴール『不安の概念』）をみてとるような思考の系譜があり、西田の思想もまたそこに位置づけることができる。つまり西田哲学における創造作用としてのポイエシスとは、隔絶した個的現在を連続性へと架橋すること

であり、両者の矛盾的關係をその自己同一性において行為的・制作的に直観することである。そしてこのとき重要なのは、そうした直観が同時に詩的経験の原初性に根ざしていることである。詩的言語の特異性は、たとえ紋切り型の使い古された定型句であっても、それを字義どおりに理解することで完結するのではなく、その言葉を享受する者にとって、つねに一次的経験へと個別化していく点にある。わたしたちは、わたしたちが言葉を自己に仮託するもっとも基礎的な働きを詩のうちに見いだすことができるとともに、勝義において、作る働き（ポイエシス）そのものの原質にふれているのだといえる。

(3) 美的（エステティック）なもののもつ意味を、ギリシア語のアイステーシス（感覚、感性）の概念にまでさかのぼって考察し、その文化哲学的広がりにおいて分析をおこなった。この問題を論じるにあたってとりわけ出発点となったのはカントの『判断力批判』であった。そしてカントが批判期に用いたエステティッシュ（ästhetisch）という語に着目した。カントは一般に、批判哲学内の用語使用に関して潔癖であり、この語の場合もかなり厳格な用語法を守っていたと考えられるが、ここでいうエステティッシュの使用に当たってカントはアイステーシスという言葉の由来をたえず意識していたとみなしうる。この意味で、カントにおいてエステティッシュとは、一方において、感覚、直観、知覚、構想力、感情にかかわる事柄を包括する概念である（この意味でのエステティッシュは「感性的」と訳すべきだろう）が、他方でカントの時代にすでに、芸術や自然美に関して、あるいはその評価や判定に関して、エステティッシュという語がもちいられていたという事情があり、現在においても一般に使われるのはこの意味である。『判断力批判』の中心に、美に関する趣味判断の問題がある以上、それとの連関でエステティッシュといわれるときは、「美的」という訳語をあてることも許容されるであろう（たとえばエステティッシュな判断、エステティッシュな理念は、慣用的に美的判断、美的理念と訳されてきた）。こうした文脈において、カントの美学理解を掘り起こす作業をおこなった。

(4) 以上のような西欧近代における美学研究の源流に遡行する作業とならんで、同時に、西田哲学を中心とする京都学派の思想、たとえば九鬼周造の「いき」概念の解釈や、三木清の技術論なども検討の対象となった。この研究の方向性は、比較文化論的研究をなすとともに、広義の美学研究の枠組みを拡張する試みとしても位置づけることができる。

(5) 本研究は、とくに西欧における現象学との関連において、その間文化的研究とも連関している。そのひとつの研究成果として、

M.ハイデガーの芸術論の現代的な意味とその射程とに関する分析をおこなった。ハイデガーの哲学思想は、存在と存在するもの、真理と非真理、根源性と頹落、世界と大地等々、対をなす概念によって支えられているようにみえるが、しかしこの関係は非対称であり、一方を他方に還元しうるわけでもなければ、図と地のような、前景化と潜在性の関係でもない。この研究では、このように対をなす概念にむけられた特異な思惟の本性に着目し、それと対決することが、ハイデガー解釈において大きな意味をもつと考えた。そしてこうした展望のもとに、本論の課題をなしたのは、ハイデガーが「芸術作品の根源」やニーチェ講義において切り開いた地平を、とくにデリダから現代フランス哲学による読解をも参照しつつ、いまいちど検証してみることであった。そのさい主題化されたのが「対」をめぐるテーマであり、始原をたえず二重化する思惟の運動であったのである。つまりハイデガーの言説に畳みこまれた雙の二重性（Zwiefalt, duplicité）を展開し、芸術をめぐる思惟の痕をたどりつつ、その可能性の射程を測ること、そしてデリダらの視点から照らしたされたハイデガー芸術論のもつ意味を背面から暴き示すことであった。具体的には、アイステーシス、作品、詩作という三つの契機に着目し、その各々に関して、ハイデガーを機縁にくりひろげられた議論が吟味された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

小林信之「棺一基四顧茫々と 情態性 / エポケー / 詩」、電子ジャーナル『Heidegger Forum』No.8、2014、p.15-p.31.
(<http://heideggerforum.main.jp/ej.htm>)

小林信之「美の非情性」、日本美学研究所『エステティーク』第1号、2014、p.1-p.5.

小林信之「ふれることについて 触覚の現象学」、早稲田大学大学院『文学研究科紀要』第60輯・第1分冊、2015、p.21-p.36.

小林信之「アイステーシス再考」、早稲田大学哲学会『Philosophia』第103号、2016、p.1-p.17.

小林信之「創造について 瞬間とポイエシス」、『西田哲学会年報』第13号、2016、p.56.-p.71.

〔学会発表〕（計 3 件）

シンポジウム・研究発表「創造について 瞬間とポイエシス」、京都工芸繊維大学、2015、7月26日

研究発表「ハイデガー芸術論の射程 対をなすもの問題系から」、ハイデガー・フォーラム第十一回大会、名古屋大学、2015、9月11日。

シンポジウム司会と提題 美学会第 66
回全国大会 シンポジウム「アイステース
再考」、早稲田大学、2015、10月11日。

〔図書〕(計 1 件)

小林信之(共著)「もっとも無気味なも
のへの問い 『形而上学入門』と「芸術作
品の根源」、秋富克哉ほか編『ハイデガー読
本』、法政大学出版局、2014、p.135-p.145.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 信之 (KOBAYASHI, Nobuyuki)
早稲田大学・文学学院・教授
研究者番号： 30225528

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()